

QE 豪華客船の旅 2019

旅のチカラ研究所

2019年5月

旅のチカラ研究所 植木圭二

豪華客船 QE (Queen Elizabeth : クイーン・エリザベス) で 10 日間日本一周の船旅に妻と行ってきた。それは寄港地よりも船内の方が興味深いものになった。この旅行記は 2 ヶ月前にダイヤモンド・プリンセスで行った「豪華客船の旅 2019」の続編ともいえるものになる。



(八代港にて)

第一章 出航

■ ウェルカム・ドリンクで乾杯

私と妻は今、QE (Queen Elizabeth : クイーン・エリザベス) の自分たちの船室のソファに座りスパークリングワインで乾杯している。

スパークリングワインは船室のテーブルに置かれたアイスバスケットに冷やしてあったもので、QE からのウェルカム・ドリンクだ。

さすが QE、やることが洒落ている。人は予期しない出来事には感激するもので、これは先制パンチを食らったようだ。それも嬉しいパンチだ。

部屋にはコーヒー、紅茶、スナックも用意されている。そのコーヒーカップの裏面を見ると Wedgwood の文字がある。Wedgwood は世界最大級のイギリスの食器メーカーで 1759 年に設立された高級ブランドだ。

多分私たちの船室が一番安いカテゴリーなのだろうが、船室もそれなりに広く圧迫感はない。広さは 14 畳くらいでその一角がシャワー・トイレ・洗面ルームになっている。この洗面台も機能的でお洒落なものだ。ベッド以外にソファが置いてあり、くつろぎ感を出している。

興味深いのはソファの上には畳一畳分くらいの平らな突起物が埋め込まれている。

私はすぐに理解できた。これを降ろすと 2 段ベッドの上段部分になり、下のソファをベッドにすればあと 2 名の乗客の追加が出来るようになっている。

さすがに良く考えられている。そういえば先代の QE はかつてフォークランド紛争に徴用されてイギリス兵を遠く離れたフォークランド諸島まで運んだ。客船に頼らないと島も奪回できないのかと 7 つの海を支配したあの大英帝国の凋落ぶりと、戦争になれば豪華客船もそんな使われ方をするのかと驚いたことを思い出す。それは 1982 年、私が社会人になった 3 年目のことだ。

戦争以外でも客船の利用価値は高い。例えば災害時に派遣されれば快適で巨大な臨時宿泊所になる。東京オリンピックでは東京湾に豪華客船を浮かべてホテルシップにする計画もある。



■乗船の経緯は

今回の乗船はクルーズで知り合った白井さんから届いたメールがきっかけだ。QE の日本一周クルーズに空きがあるからどうかというもので、出航までほとんど時間がないが、そのため費用は破格の安さだ。メールをもらった時、私は琵琶湖・北陸の旅の真ただ中だった。

いくら私が暇人でも、10 日間も予定が丸々空いていることは無く、行くためにはいくつもの予定を変更しないとイケない。それでも絶対に不可能というハードルの高さではなかったので余計悩むことになった。

そんな時、旅先の田舎町で見かけたポスターには日本船の 3 泊 4 日の国内クルーズが 24 万円

とあった。いくら田舎町とはいえ高い、港に行くまでの交通費や地元の旅行代理店がお世話する費用があるのは分かるが、高過ぎる。

私が悩んでいる QE のクルーズは 10 日間で日本一周+韓国というもので、価格も安い。こんな棚ぼたの美味しい話に何を悩んでいるのだろうか。しかも現在の私は旅行を生業にしている。そう考えると悩みも吹っ切れて、旅行先からクルーズ代金の払い込みや予定の変更などに奔走した。

バカ高いクルーズのポスターが私の背中を押してくれた訳だが、しかしこの現状では地方に住む人が旅行する機会は増えないだろうとも心配になる。

■船の中を散策

スパークリングワインを飲み干し、荷物をほどくと私の興味は船内の見物に移る。

ロビーは 3 階吹き抜けで豪華だけでなく気品のある内装、落ち着いた雰囲気印象的で、私たちの目を堪能させてくれる。もちろん音楽のおもてなしもある。美人 3 人の弦楽三重奏だ。



1階から3階の吹き抜けにはロビー、フロントがあり、その他にレストラン、バー、ショップ、シアター、ダンスホール、カジノ、ギャラリーなど共有施設が集中している。

驚いたことに図書館もある。それも2階と3階にあって図書館内部の螺旋階段でも繋がっているお洒落な造りになっている。蔵書は約8000冊、日本語の本もある。最新の雑誌も多数あるので常に買っているのだろう。図書館内の上等な椅子に座ってゆったり読書もできるが、無料で貸し出しもしてくれる。そのために専門のスタッフが受付に座っている。



4階から8階は全て客室で、完全な客室エリアになっている。

9階はレストラン、エステ、プールがある。この船にはプールは2つしかないが、プールサイドのリクライニングチェアは安物ではなく高級品だ。プールで真剣に泳ぐのが目的というよりもプールのある生活を楽しむかのようなようである。



10階はラウンジ、11階の半分はテニスコートやクロッカー（クロケット）場がある。屋外に10m四方くらいの大きなチェス盤があり、人の腰ほどの高さの駒が並べられている。山形県天童市の人間将棋ほど大きくはないものの、これが英国流かと少し驚く。

そして 11 階の半分と 12 階はグレードの高い船室専用のレストランやテラスがあり、私たち一般客には立入禁止になっている。それでもちょっと覗いてみると、船の中なのに中庭があり、テーブルとパラソルが常設してある。リクライニングチェアも 9 階のプールサイドのものよりもさらに高級品だ。ちょっと試しに寝てみたが、もはや離れたくないほど気持ちいい。屋外のものなのにフカフカだ。



私の友人でリゾートを研究している者がいて、彼によると「リゾートとは貧富の格差が成せるもの」という。格差があればある程リゾートがよりリゾートとして成立する。いかにも欧米の文化で、日本人にはなじめない部分もあるかもしれないが、リゾートとはそういうものだそうだ。

リゾートを満喫する心の奥底にはその格差による優越感がある。それは使う側と使われる側という構図だけではなく、お客の間にも存在する選別意識のようなものがある。「私たちは特別よ」というものだろう。それは決して悪いことではないと私は思う。「いつかは、ああなりたい」という気持ちが向上心に結び付くからだ。

この船は大英帝国の貴族社会のような匂いが感じられる。それは現代日本の日常生活とは少し違和感があるかもしれないが、非日常のクルーズ船だからこそそれも面白い。

第二章 太平洋、函館へ

■ 船旅が始まる

船は横浜を出港して、函館に向けて太平洋を北上している。

朝食で相席になった夫婦は私の故郷の群馬県桐生市在住で、いきなりローカルな話題で盛り上がる。その他に女性 2 人組は富山と九州に住んでいて 30 年くらい前に旅で知り合い、以来いろいろなところに行っているが、お互いの私生活は全く知らないという。

船旅の食卓は出会いがいっぱいだ。お互い話をしたくて、うずうずしている。

それにしても待たされる。レストランに入るのに列に並ぶこと 5 分、着席してオーダーに来るまで 5 分、料理が出るまで 30 分、朝食なのにこれは遅い。

しかし、こんなことは当たり前だという感じで欧米人たちは優雅に食事をとっている。

日本人はせわしい生活に慣れ過ぎているのだろうか。時間を楽しむことはできない。どうしても「待たされる」という発想になる。

私も反省しきりで、こんなに優雅なレストランで食べる朝食はもっと楽しまなければもったいない。料理はもちろん美味しいが、このレストランは2階と3階の広いエリアを中央にある豪華な階段で繋げている構造になっており雰囲気がとても良い。



どんな人たちが乗船しているのだろうか。興味に任せてフロントに立ち寄り今回の乗客の人数を聞く。全体では1947人、その内日本人は約1200人、イギリス人が約180人、オーストラリア人が約160人、アメリカ人が約120人、そして中国人は16人というから静かなはずだ。

■田崎真也

ワインのソムリエで有名な田崎真也が乗船しており、講演があるので聞きに行く。

彼は、元々は海が好きで船乗りになりたかったという話から始まる。

私たちが海を見るときに一体何キロメートル先の海面まで見ているのか興味を持ったという。地球は丸いので、あるところまでしか見ることが出来ない。

その答えは、 $\sqrt{A \times 3569m}$ という数式でAのところに見ている視点の高さをメートルで入れると、求められるという。つまり目線の高さが1mならば $\sqrt{1}=1$ なので3569m先まで見える。例えばこの船のウォーキングデッキは3階なので海面から16mくらい、 $\sqrt{16}=4$ なので14kmくらい先まで見ることが出来る。

この数式を知っていると便利だ。例えば富士山は3776mで、どれ程離れて富士山を見ることが出来るかも分かる。答えは約220km、障害物がなければ三重県でもギリギリ見えることになる。

おっとワインの話だ。

そんな彼がワインと出会って、これからは日本でもワインの時代が来ると感じるものがあったというので19才でフランスに修行に行き、そして数々の試練の末に大成功をおさめる。2010年から2017年まで国際ソムリエ協会の会長も務めている。

彼の話では、ワインは料理を引き立てるためにある。その意味ではワインはソースと同じだという。ところが日本酒は逆で、日本酒の味を引き立てるために酒の肴がある。

赤ワインは皮と種をそのまま漬け込むもので、必然的に種も入っている。だから唐辛子や山椒などのスパイスと相性が良い。従ってステーキに胡椒など振るので赤ワインが合うことになる。

赤ワインは胡椒や唐辛子や山椒などを振って食べるものの味を引き立ててくれる。

ところが白ワインは種も皮も取って発酵させるので酸味が出てくる。従ってレモンや柚子を搾るような料理と相性が良い。白身魚には白ワインという組み合わせはそこからきている。白ワインはレモンや柚子を搾るのと同じことらしい。

これに付け加えて、もっと簡単に判別させるには色だという。濃い色の料理は赤ワイン、薄い色の料理は白ワインだという。うん、すごく分かり易い。

その道を究めた人の説明は簡単で分かり易い。逆に難しいことばかりを言う人は、実はあまり分かっていないというのは世の常だ。

■ガラ・イブニング

本日のドレスコードはフォーマル、この船ではガラ・イブニングと呼んでいる。ガラはお祭りとか競技という意味なので、お洒落を競い合っ楽しむ夜ということになる。

夕食会場のレストランに入るには男性はタキシード、ダークスーツ、女性はイブニングドレス、カクテルドレスの正装が必要と案内されている。

そもそも私はタキシードとモーニングの違いも知らなかった。これを機に調べると、男性の正装は大きく3つのレベルに分かれているという。最も格式が高いのが燕尾服（えんぴふく）とモーニングで、次の準正装がタキシード、一番下は略礼服のダークスーツになる。ただ、モーニングは名前が示すように夜は着てはいけないということを初めて知った。

さて、私の服装はというとダークスーツだが、小物にはこだわっている。世界遺産登録前の富岡製糸場で買ったシルクのネクタイ、カフスは世界一周の時に娘夫婦からプレゼントされた世界地図をモチーフした左右が違うものでユーラシア・アフリカ大陸と南北アメリカ大陸がそれぞれ描かれている洒落たものだ。

人間、少しでも強みや誇れる部分があると気持ちが落ち着くというものだ。

他の乗客の姿を眺めていると、男性はタキシードに蝶ネクタイが主流だ。私のように普通のネクタイは少数派で、全体の2割くらいだろう。

しかしながら、誰もかも思い思いの服装で自己主張をして楽しんでいるというのが素直な印象だ。それがガラ・イブニングの意味するものだろう。

女性はイブニングドレスが主流で、着物もチラホラ見かける。



■いろんな人たち

この船は夕食のテーブルが指定されており、私たちと同じテーブルに女性 2 人組がいる。

年齢的には 10 才差くらいに見え、友人かと聞くと意外にも親子だという。血が繋がっていないというので嫁姑か養子らしい。詮索するのも失礼なのでそれ以上の質問はやめたが、いろいろ話をしていると 2 人の人生感が全く違う。それでも息の合ったコンビぶりには驚く。

人間同士の付き合いには適度の距離感と、お互いが認めあうことが必要だということはこの親子が教えてくれる。

私たちの奥にある 2 人掛けのテーブルにはやや高齢の日本人カップルが座っている。

典型的な日本人の中高年夫婦で 2 人の間には会話がな。時おり配膳される料理に手をつけるが無言なので食事に集中して食べるのは早い。するとまた無言の業が始まる。そのうち夫の方が手持無沙汰なのかカメラをいじり始める。そして妻は黙って遠くを見ている。

中高年になると夫婦の会話が減るのは理解できるが、この夫婦は別格で会話がな。

この夫婦は一体 QE に何しに来たのだろうか。想像するに、夫が妻に日頃の内助の功に感謝して乗船なのだろうが、これで伝わるのならば凄。

その隣のテーブルにも日本人中年カップルがいるが、男性に比べると女性が若くそして綺麗だ。相席の人たちと話が盛り上がっている。先ほどの夫婦に比べると対照的な様子が面白い。

私の旅行仲間の間では、旅先で手を繋いで歩いている日本人の中年カップルは訳アリのカップルだという説がある。

この 2 人はいかにも手を繋いでいそう。

欧米人と日本人の 2 組のカップルが相席しているテーブルがある。多分夫婦であろう日本人の妻が英語を話すので 3 人が英語で話し、夫の日本人男性は聞き役だ。時おり笑いが起こるとその内容を妻が夫に日本語訳して話す。彼がワテンポ遅れて笑う。何となくよくあるシーンだ。

私なりに推理すると、夫は日本ではそれなりの地位にあり仕事が忙しく今まで夫婦で旅行などしてこなかった。今回は海外旅行好きの奥さんに強く誘われて QE に乗ったが、そもそも船旅も初めてで驚きの日々を過ごしている。

推理どおりだとすると、下船後の彼の人生がどう変わるか非常に興味深い。

船の中では様々な人間模様を見ることが出来る。そして私はその裏側を勝手に想像して楽しんでいる。いや、それは私にとってはとても勉強になっている。

■シアターは素晴らしい

船には 850 人座れる大きなシアターがある。1 階から 3 階を吹き抜けにした立体感のある豪華な造りになっている。

両サイドにはバルコニーのような個別のテーブル席がいくつもあって格式を感じさせてくれる。最初は特別な人しか座れないかと思っていたが、誰でも座れることがわかり私たち夫婦のお気に入りの席になる。



この素晴らしいシアターで昨夜はアルトサクソとピアノの協演という見事な演奏を聴く。

そして今夜は女性オペラ歌手のステージで、もちろん生演奏が付いている。ピアノ、ギター、ドラム、ベース、トロンボーン、トランペット、サクソ、フルート、バイオリン、ビオラ、チェロという必要最小限の楽器の構成になっている。

女性オペラ歌手は実に上手い。オペラというよりも映画音楽やポピュラーソングが主体でオペラを知らない私も十分に楽しめる。

残念ながら写真は撮ってはいけないと事前に案内される。

■4月21日

本日4月21日はこの船の命名者であるエリザベス女王の誕生日で、1926年生まれなので今年で93才になる。そしてもうひとつ、キリスト教の復活祭（イースター）の日にもなっている。

この2つの日が重なったというのは偶然で、復活祭は「春分の日の後の最初の満月の次の日曜日」という決め事になっており、年によって日付が異なる。十字架に架けられ死んだキリストが3日目に復活したことを祝う行事で、キリスト教徒の間では重要な日だ。さらにエリザベス女王はイングランド国教会の首長も兼ねている。

そんな特別の日なのに、そのための船内イベントはあまりない。厳かにというQE流かもしれない。

船室に毎日配達される船内新聞にあたるデイリープログラムという冊子を見ると、朝早くにイースターの日曜礼拝があるだけだ。催しではないがロビー中央に復活祭の飾り付けが昨日から登場したのと、船内に飾られているエリザベス女王の肖像画の前で写真を撮る人が増えたくらいだろう。



■函館に上陸

横浜を出航し、丸一日の航海日を挟んでこのクルーズ最初の寄港は函館だ。

クルーズターミナルでは函館のパンフレットが配られている。それは当たり前の話だが、驚いたのは次の寄港地の秋田から宣伝のためにわざわざやってきて秋田のパンフレットを配っている人がいる。その力のいれように感心しつつ、そこまでしないとイケない地方経済の状況も心配になってくる。

シャトルバスで函館駅に着くと、女子高生 30 人くらいのお出迎えがある。聞くと本日演奏会があるので見に来てほしいということである。

その時はその言葉の意味することを私は理解出来ていなかった。

ただ、地元の女子高生が QE の乗客のお出迎えとは凄いなと思い、「どこの高校？何年生？」と聞くと、「遺愛女子高の 3 年生です」と返ってくる。「3 年生だと受験とか大変だね」などと話しをして彼女たちと別れる。

■湯の川温泉は熱い

昨日の昼食で偶然同じテーブルに座った太田さん夫妻と意気投合し、函館では一緒に行動しようとしていたのので、太田さん夫妻との 4 人旅になる。今回もまた「旅は道連れ、世は情け」という言葉が合いそうだ。この言葉は旅の一面を表す私の好きな言葉でもある。

函館駅から市電に乗って湯の川温泉に行く。すると市電の中のつり革広告で面白いものを見つける。「世界で最も有名な豪華各船クイーン・エリザベスがいよいよ函館へ」と書かれており、さらに「港から賑わいをもたらしてくれる客船を温かく歓迎しよう」とある。我が目を疑うような文言だ。

街全体でのこの熱烈な歓迎の背景には地方経済の疲弊などもあるのだろうが、やはり QE は特別な存在で憧れや期待が強いのだろう。

しばらく街を散策し、本日の目的の立ち寄り温泉を探していると老人保養センターに入浴道具を持って入っていく人、出てくる人がいる。ひょっとしたら私たちも入浴できるかも知れないと中に入って聞いてみると、一般客は入浴できないと断られる。それでも受付の親切な人が近くの銭湯を教えてくれる。

その銭湯はこの地域でもっとも熱い湯だということで時々マスコミ取材が入るそうで、すぐ近

くなので源泉は同じだという。

私がいろいろな人に声を掛けて聞きまわっているのですが、太田さんは NHK の「家族に乾杯」のようだと言っている。私もあの番組は好きなのでよく見ているが、笑福亭鶴瓶の領域まで届くものとは全く思っていないが、少し嬉しい気分になる。

銭湯の受付の女性に聞くと「44℃くらいなのでそんなに熱くないですよ」と、「それなら問題ない」と私が言うと、「でも熱い方の湯船は 46℃～47℃ありますから」と付け加えられた。温度の違う浴槽が 2 つあることは分かったが、「これは手ごわい」と私はひそかに声にする。

湯殿に入り、2 つある浴槽のぬるい方にまず挑戦するが、これがかなり熱い。それでも何とか入浴する。問題の熱い方に挑戦するが、足首まで浸けたところであまりの熱さにそれ以上進まない。それどころか浸かった部分がビリビリとしびれている。全く歯が立たない。これ以上の挑戦は体に悪いので諦める。太田さんも頑張ったが同様にギブアップしている。温泉評価委員会を主宰し自称温泉通の私にしてこんな経験は初めてである。

湧出温度 65℃の源泉が銭湯の隣の敷地にある。そのまま引いているようで熱いはずだ。

■感動の吹奏楽

帰船すると函館駅で出迎えてくれた女子高生たちが乗船してロビーで記念撮影をしている。私はちょっと驚く。彼女たちが演奏会と言っていたのは QE 船内の一番大きいシアターで演奏することだと今知った。一流のプロが演奏する場所でアマチュアの子高生の演奏を聴くのも面白い。

開演時間に間に合うように会場にいくと、席はほぼ埋まっている。外国人の姿も多い。

彼女たちは「遺愛女子高校 吹奏楽局」で通称は“あいすい：AISUI”という。演奏の前に顧問の先生から挨拶があり、その挨拶の内容を女子高生が後を追って英語で話す。これに外国人が感激したらしく、いや日本人も感激して大きな拍手が起こる。その顧問の先生がそのまま指揮者になって演奏が始まる。

最初は We were the world などのスタンダードナンバーを演奏する。2 曲くらい演奏するとまた曲や学校の紹介などを英語の通訳を伴って話す。そしてそれがまた受ける。

部員は 130 名いて、今回は会場の都合で 55 人しか来ていないという。この学校の吹奏楽は凄いいということに段々認識し始める。

最後の曲になり、良かったらアンコールをお願いしますと先生が挨拶して演奏が始まる。今までもそつがない演奏をしていたが、映画「スイング・ガールズ」のように演奏しながら踊りを入れて躍動的があるパフォーマンスが始まる。高校生らしく、元気で、初々しく、楽しそうに、そして一生懸命やっている姿に感動して会場からは手拍子も起こる。

演奏が終わり、お決まりというか、おねだりのアンコールの拍手が続き「アンコール」という大きな声が会場から聞こえる。それを受けてアンコール曲の演奏が始まる。

会場は大盛り上がりを見せている。最後はステージの最前列で演奏していた 10 人くらいの生徒が会場の通路に降りてきて一体感を盛り上げる。よく考えられている演出だ。とても高校生とは思えないほど素晴らしい。

アンコール曲が終わり、それでも拍手が鳴りやまない。なんとスタンディングオーベーションまで始まった。私も妻も立ち上がり、周りを見渡すとほとんどのお客がスタンディングオーベーションに参加している。欧米人はステージに感動した場合は正直にそう表現するとは聞いていたが、周りの日本人も私自身も演奏が如何に感動的だったかを素直に表現出来ていることに驚く。

プロでもこんな光景はあまり見たことがないのに、アマチュアの高校生のステージでこんなことがあるのかと我が目を疑ってしまう。

鳴りやまない拍手に困っているのは顧問の先生の指揮者で、用意したアンコール曲はもうないらしい。半分うれし泣きの「泣き」が入るが、会場のアンコールの声も拍手も鳴り止まない。その時間が結構長く続いていたように私には感じられた。

そうしたらパーカッション担当の生徒のひとりが皆に声をかけて曲を決め、開始のタクトを始めて演奏が始まる。先生も半泣きのままようやく落ち着き、観客も座って演奏を聴き始める。

そして本当に最後の演奏が終わり、先生の挨拶は「この素晴らしいクイーン・エリザベスのステージは生徒たちの一生の思い出になります」と締めくくった。やはりこの船は世界最高の客船だという認識の上で、その乗客から手厚い評価を受けたことに対するコメントだろう。



乗客も高校生のステージと半分悔っていた。いわば期待していなかったことが良い方向に裏切られて感動する。その感動は何倍にもなるというものだ。「期待と落胆」ではなく「偶然と感動」だ。

わずか 40 分間のステージだったがシアターを出る乗客たちは、口々に良かったと言っている。それも隣にいる誰にでも声を掛けていているということが印象的だった。

第三章 日本海、沿岸各地

■これが英国流

夕食のテーブルで聞いた話が面白い。乗船して知り合った人の話と前置きをして話が始まる。

先日のガラ・イブニングにパンタロンスーツを着てレストランに入ろうとした女性が、正装でないから駄目だと入場を止められたという。慌てて部屋に戻ってイブニングドレスに着替えて入れてもらえたという。

彼女はグレードの高い部屋に泊まっているのでレストランも普通のところではなく特別なレストランを使っている。彼女の部屋は10日間で100万円というから、この船では最上級に近い部屋で、そんな人が着るのだからパンタロンスーツも高級品なのだろう。

ところが英国では女性の正装はドレス、最低でもスカートは必須で、ズボンは仕事着という認識があるらしい。日本的な私の経験では、高い部屋に泊まっている金持ちには何でも許してしまうものだが、レストランの入口に立つボーイは英国流を貫いたということだろう。

■レストラン

この船には5つのレストランがあり、そのうちの1つが気軽に誰でも使えるビュッフェスタイルのレストランになっている。服装こそはカジュアルでいいが、料理はレベルが高く種類も多い。料理は自分で持ってくるが、あとはウェイターが片づけてくれる。もちろんウェイターを呼べばアルコールの注文も出来る。

席はゆったりとしており、9階にあるので窓側に座れば海が見える。カジュアル船ならばここがメインレストランと言ってもおかしくない。

このレストランは朝5時から食事を提供しており、あとはメニューを変えながら朝昼晩の食事を提供する。最後は夜中2時まで夜食の提供がある。その間ならばいつ行っても何か食べられるようになっている。さらにコーヒー・紅茶やジュースは1日中飲める。



残りのレストランは各部屋のグレードに応じたレストランで、私たち庶民が使うレストランは、座席数は 800 席もある。このレストランのみ夕食は 2 回に分かれて入れ替え制になっている。

料理の質も種類もレベルが高い。メニューは毎日変わる。前菜、主菜、デザートが各 10 種類くらいあり、どれをとっても美味しい。特に私たち夫婦の間では牛肉の評判が非常に良い。

デザートの上にコーヒー・紅茶と一緒にチョコレートやマシュマロなどの甘い菓子が出てくる。この時に私たちはいつもアールグレイの紅茶を注文していたので下船するまでにはウエイターが必ずアールグレイを持ってくるようになった。

それ以外のレストランには入れないので何も書けないが、パンフレットには最上級のレストランではメニューにないものも頼めると書いてある。

■秋田の朝

船は秋田港に接岸し、朝食のテーブルで隣に座った英国人夫婦に声を掛けられる。日本には初めて来たという夫婦は QE の母港であるサザンプトンから飛行機で成田にやって来て横浜から乗船したという。このクルーズでは是非 cherry blossom 桜を見たいと言っている。

奥さんはベジタリアンということなので、私は納豆を持って来て、かき混ぜてタレと辛子を入れて渡す。彼女は箸を上手に使いながら不思議な味に頭を横に傾けながら最初は少し食べていたが、やはり苦手だったようで途中でさっと箸をひいた。

ついでに「What is your favorite Japanese food? (好きな日本食は?)」と聞くと彼女は即座に「British! (英国のものよ!)」と返事が返ってきた。誇り高き英国人を見た。

クルーズターミナルでは歓迎式典をやっている。後方には QE の船体が大きく見える。秋田県知事、秋田市長、ミスあきたこまちも参列している。さらに秋田犬までいるから秋田のオールスターと言っている。そこまでクルーズ船、QE に期待しているのかと驚いてしまう。

歓迎式典が終わると県知事以下の関係者とマスコミ各社が船の中に見学に入る。一般の見学者もいるが、約 2000 名の応募者の中から抽選で 50 名だけが選ばれたという。見学で中に入るだけで倍率 40 倍と、驚きの数字になっている。



秋田市内の千秋公園に行く。桜は満開だ。朝食の時に **cherry blossom** を見に来たという英国人夫婦の笑顔がよぎる。満開の桜がプレゼントできたことに私は何故か嬉しく思えてくる。

公園の前の広場でもイベントをやっている。近くにいる男性スタッフに聞くとやはり **QE** が入港したからだという。彼は秋田市役所の観光振興課で働いている。

その彼に函館でも秋田の人がパンフレットを配っていたことを伝えると、「次は自分の番なので次回入港時には自分が函館まで出向きます」と力強い一言を聞く。

■アフタヌーンティー

3 時前に帰船したので、アフタヌーンティーの時間に間に合う。結果として昼食を抜いてしまったのだが、本場英国のアフタヌーンティーは夕食まで待てないという食いしん坊の貴族婦人が始めたものなので、それなりのボリュームがある。まずは紅茶が注がれ、そしてサンドイッチに始まり、小さいハンバーガー、そしてスコーンが運ばれてくる。スコーンはスコットランド生まれのケーキのような菓子でウェイターが特にしつこく勧めてくる。英国のアフタヌーンティーと言えばスコーンだと言っている。スコーンには **QE** という文字まで入っている。



スコーンのアートにもケーキが運ばれてくる。これもまたたくさん運ばれてくる。充分に空腹を満たすことができる。

この生活は太りそうだ。しかし心地よい時間の流れを感じる。

■秋田出航

出港の時間が近づいてくると乗客も船に戻るために集まってくるが、見送りの人も多く集まってくる。まあ、見送りというよりも **QE** の見物だろうが、その人数はざっと見て 1000 人はいるだろうか。船内見学希望者 2000 人ということからすれば当然かもしれない。

出港に合わせて花火が港の防波堤から打ち上げられる。数は 10 発、20 発というものではなく、もう一桁多い。小規模な花火大会くらいだ。残念ながらまだ明るいので花火はよく見えないが、地元秋田は随分奮発したようだ。

船からは「ありがとう」とか、「秋田最高！」という掛け声もかかるほどに乗客が喜んでいる。私も今までいろいろな出航シーンをみているが、本格的な花火とこんなたくさんの人々の見送りは初めてである。昨日の女子高生の演奏会とはまた違う感動をする。

QE からは「ありがとう」の意味を込めて汽笛を鳴らし、秋田港を後にする。

■芸術とゆとりの時間

この船には観賞と販売のためのギャラリーがあって常時 100 枚くらいの絵画が展示してある。そしてここにも専門のスタッフが配置されている。

その絵画が並んでいるギャラリーを通過しようとする、昨日まであった子供を描いた絵がなくなっているのに気づく。きっと売れたのだろうと妻と会話をする。実はその絵は双子の男女の子供が可愛く描かれており、ちょうど私たちの双子の孫のようだった。

ロビー中央を通過するとハーブの演奏をやっている。船の専属の綺麗で若い女性が演奏している。その容姿ではなく、あまりに綺麗な音色なので足を止めて近くの椅子に座って 30 分も聞いていただろうか。この船は英国貴族の生活がそのまま体験できる。

夕陽を見ながらコーヒーを飲む。ゆとりのひと時ともいえるこの時間はこの船ならではの空気感がする。同じ時間でも日本の高度成長を支えてきた効率化や時間管理とは全く違うものだ。

■日本人は長期旅行が苦手

日本近海なので船の中では NHK の BS 放送を見ることが出来る。

今年のゴールデンウィークは 10 連休になるので、「長くて何をやっていいか分からない」というテレビの街頭インタビューの声が意外に多いのに驚く。旅行するにも 10 日間なんてとんでもない、2 泊 3 日くらいでいいという人も多い。

日本人は長い休みが取れない、いや上手に使えない民族かもしれない。少ない時間を如何に効率的に使うかには長けているので、旅行に行っても一瞬のスキも無いように予定を組み立てる。短期間ならばそれで良いが、10 日間も続くと疲れてしまうから長い旅行ができないのだろう。

旅に期待するものが根本的に違う気がする。

それを裏付ける数字がある。日本人の国内旅行回数は年間平均 1.4 回、そして 1 回当たりの宿泊は 2.3 泊という。

クルーズは最低でも一週間は必要なので敬遠されがちで、JR 各社の豪華列車の 2 泊か 3 泊の旅に人気が集まる。高額にも関わらず、全く予約が取れない状況が続いている。

海外旅行者いわゆるアウトバウンドが増えない理由は費用よりも日数にあるようだ。

都道府県別の出国率という数字がある。これは人口に対する海外渡航者数の割合で、都道府県別にどのくらい海外に出ているかを示している。

1 位は東京都で 28.5%、2 位は神奈川県で 20.9% と大都市圏が続く、下位の 46 位が秋田県で 3.4%、47 位の青森県は 3.2% になっている。青森県は年間で 100 人のうち 3 人しか海外に行っていない。

地方では海外旅行がいかに縁遠いものなのかを裏付ける数字だ。

私の背中を押してくれたあのポスターもそれを物語っている。

■これが牛丼？

レストランのメニューで面白いものを見つけた。牛丼だ。

フランス料理中心のこの船のメニューで和食は初めてだ。出航 4 日目で、そろそろ和食を出そうかとシェフが考えてくれたのだらうと勝手な解釈をする。

しかし出てきたものは私が知っている牛丼とは全く違うもので、お皿にモヤシと和えた牛肉の切り身にソースがかけてある。牛肉の大きさはとフライドポテトの半分くらいで斜めに切っており、乱切りである。そしてライスがプリンのように円錐状にして隣に盛り付けてある。

ソースは和風に近いが、やはりフランス料理のソースの味だろう。まずくはないが、違和感が残る。

これを牛丼と書いてしまった日本語訳の明らかな失敗だろう。少なくとも丼（どんぶり）ではない。

「野菜和え牛肉の乱切り焼き、ライス添えプレート」という表現なら理解できる。

挑戦する姿勢は評価できるものの、この船に乗って唯一不満が残る料理で、その意味では貴重な料理になる。

それほどに他のどの料理も美味しい。特に牛肉の料理は柔らかさも味も絶品だ。



■金沢寄港

金沢寄港の本日はのんびりと朝食をとってからプールサイドに出て港の景色を眺めていると、一見して分かるような地元の要職者やミス金沢のような和服姿の女性たちがぞろぞろとやって来る。本日も歓迎セレモニーが開催され、その出席者たちだろう。

しばらくして数人がまたやって来る。今度はちょっと違うようなので軽く挨拶すると新聞社の取材ということで早速名刺交換をする。案内しているのはQEの広報の人だ。

私から新聞記者にQEの感想を聞こうとすると、逆に質問される。私が答え始めると新聞記者はすぐにメモをとり始める。この船に何人乗っているとか数字を出すと広報の人が「数字は後で説明しますから」と制されてしまう。数字には敏感だ。

「船旅に何を期待しますか？」と質問されて、私は「時間ですね」と答える。

日本人は長い期間の旅が上手くできないこと、そういう中でクルーズ船への期待を伝える。

シャトルバスで金沢駅に行く。今回のクルーズでは寄港した港からは無料のシャトルバスが運行されている。港からで駅や繁華街まで運んでくれるので実にありがたい。

バスは地元の自治体のご厚意で運行頂いていると、いつも船内放送で案内されている。そしてどのバスも新しい豪華なものである。QEだからこそその地元の対応を感じられる。

私たちは金沢には何度も来ているが、兼六園を最後に訪れたのはまだ隣に金沢大学があった時代だ。今は、大学は郊外に移転して跡地は金沢城公園になっている。移転の開始は1989年（平成元年）ということなので私は少なくとも平成になってから金沢大学、いや金沢城公園を訪れていないことになる。

金沢大学の移転には反対もあったようだが、今この金沢城公園を見て回ると移転は大正解だったと私には見える。校舎を全て取り壊し、天守閣はないものの門や櫓を再建し、広く大きい広場や緑ができた。公園としては理想的なものになっているように思える。

地元の幼稚園や小学生たちが先生に連れられて来ている。修学旅行の生徒たちも含め多くの観光客で賑わっている。観光客の半分くらいは外国人で、彼らもまた古都金沢の城址を堪能している。この人たちの笑顔を見ていると街の中心には城や公園が必要なのだとつくづく感じる。

そもそもこんなに観光客が来るのでは大学があっても勉強にはならないだろう。

■ここにも旅の達人

金沢の出港の見送りイベントも他の港と同じように盛大だったが、そのイベントを妻の隣で見ている女性が偶然にも3日後に寄港する八代の人だという。

旅が大好きでいろいろな船、いろいろな国にも相当行っているようで、出航イベントが終わって私たち3人で旅行談議を始める。

南極にも行ったことがあり、南極は一般的には南米大陸のウシュアイアから入るが、彼女はニュージーランドから入った。そこにはあの有名な探検家アムンゼンが使った基地がありアムンゼンが食べた缶詰などが置いてあったという。アムンゼンの南極点到達は1911年のことだ。

あるいはアフリカ大陸の道なき道を4WD車で18日間走り続けたなど話も聞いた。

ダイヤモンド・プリンセスの話にもなった。私が、火災にあった船は名前を変えてサファイア・プリンセスになったと言うと、彼女は素早く反応して「その話はタイタニックみたいですね」と返ってくる。

タイタニックは沈められたという陰謀説を追って本も出ているという。これは面白そうだ。

短時間だがいろいろ旅の話をする事が出来た。その中でお互いを感じていることは周りの人があまり旅に出ないことだ。

彼女が発した言葉で印象的だったのは「旅を知らないと人生の半分を損する」だ。

■タイタニックは沈められた

タイタニックの沈没の謎について少し調べたので、簡単に書く。

タイタニックには、オリンピックとブリタニックという姉妹船があつて、特にオリンピックは外観や内装がタイタニックと非常に酷似していた。

オリンピックはタイタニック就航の2ヵ月前に軍艦と接触事故を起こした。従ってこれら3隻を所有する会社は多額の負債を抱える事態になり、このままでは会社は倒産する危機に陥っていた。

会社には就航を控えているタイタニックと、傷ものになったオリンピックがあつたことになる。そこで不要なオリンピックをタイタニックとすり替えて就航させて、事故で沈没すれば保険金が入ってくるというアイデアが生まれる。そしてこのアイデアは実行された、いや実行されたい。

この自作自演の沈没劇を裏付けることがいくつかあるという。

まず、就航1週間前のタイタニックに300億円以上の保険金がかげられた。沈まない船が売りのはずなのに不思議だ。オーナーと関係者50人程が、直前に乗船キャンセルをしたとか。他船からの氷山警告を無視したとか。双眼鏡が行方不明になり氷山の発見が遅れたとか。保険金が2週間という異例の速さで支払われたとか。もっともらしいことがたくさん出てくる。

この話の真偽の程はともかくも、1912年のあの沈没事故で約1500人もの犠牲者がでたのは事実だ。タイタニックは46328トン、全長269m、その時の乗客1316人、乗組員は908人だった。

■洗濯

10日間の旅では洗濯も必要になる。船内にはランドリーサービス以外に、コインランドリーがいくつか設置してある。正確に言うと、無料なのでコインは不要だ。洗濯機と乾燥機が使用でき、洗剤も無料だ。おまけにアイロンとアイロン台もある。

ただ問題なのは4階から8階まで各階3台ずつで、合計15台しかないことだろう。私も空きを探すのに苦労した。そして終わってもそのままにしていると勝手に開けて別のバスケットに移される。これが英国流なのかもしれない。

とは言っても私はイギリスでコインランドリーを使ったことがない。

■ゲゲゲの鬼太郎の街

鳥取県の境港市に入港し、船内では地元のテレビ局が取材していた。私たちはテレビ映りを気にして身だしなみを整えたりしていたが、インタビューされることなく余計な心配に終わる。

境港市は鳥取県と島根県の境界にある。だから境港と呼ばれたのだろう。そしてゲゲゲの鬼太郎の作者、水木しげるの故郷でもある。

境港駅から水木しげるロードという観光用に整備された商店街がある。途中で水木ロード郵便局という珍しい名前の郵便局があり、消印に鬼太郎のスタンプを押してもらえるとというので立ち寄り、妻がハガキを買う。

ハガキの表面の消印は郵便局で押してもらうが、妻は裏面にはいろいろな妖怪のスタンプを押し始める。スタンプは水木しげるロードの各店舗の店先に置いてある。このハガキを投函するだけでちょっと面白い62円の土産になる。

こんなことを私たちがやっているのと、それを真似してハガキにスタンプ集めをする人たちが増えてくるから面白い。いかにも日本人らしい行動パターンだ。

私たちの世代にとってはゲゲゲの鬼太郎は子供の時によく見たマンガで、水木しげるロードも馴染みやすい。

ただいつまでもゲゲゲの鬼太郎では人は呼べないだろう。それは地元の人々も分かっているはずだ。だからクルーズ船を呼び込みたいのだろうが、呼び込むためには街の魅力をどうするのかという本質的な問題が残っている。

その答えは、何だろうか。

街興しに成功した国内外の地域の事例は多い。

例えば由布院温泉はさびれて存亡の危機の時期があり、皆で街の将来を話し合い、全世界を調べた結果、ドイツのバーデンのような保養型の温泉地を目指すと決めて50日間もドイツに視察団を送った。1ドル360円の時代で費用もバカにならないが、費用も住民の協力で集めたという。目指すものが決まってからも話し合いと創意工夫の末に現在の温泉地になった。現在は由布院、いや湯布院はブランドになっている。当時の姿からは想像もできない。



■ マスカレード・ボール

本日の夜はマスカレード・ボールと呼ばれるイベントがある。マスカレードは仮面で、ボールは舞踏会、つまり仮面舞踏会が開催される。

仮面舞踏会とは、階級社会だった中世ヨーロッパで、仮面をすることで素性を隠し身分や階級を超えて誰もが平等に踊りを楽しめる。自由になり、欲望を解放し、快楽に酔いしれることは仮面の効果だ。今でもベネチアカーニバルとして続いているのは非日常への変身願望からだろう。

それは何となく旅と似ている。非日常に身を置いて何の利害関係のない人たちと触れ合うことは、心が開放される。

本日はガラ・イブニングでもあり、船内はかなり異様な雰囲気になっている。私たちもフォーマル衣装に身を包み、夕食後に仮面をつけて舞踏会に行ってみる。

仮面は船内で販売している。私の仮面も船内で買ったものだが、この船に何度も乗っているベテランは自分で作って持参している。

ダンスパーティのホールには30組くらいが踊っているが、仮面をつけて踊っている人は半分くらいか。それでも何とも特別な雰囲気が感じられる。照明も昔のロウソクの雰囲気を出すようにいつもよりも暗く、赤い。

中世ヨーロッパにタイムスリップしているようだ。



第四章 東シナ海、釜山から八代

■ 25年ぶりの釜山

韓国の釜山に入港する。実は1994年の本日より4月25日に釜山に来ている。そして本日は私たちの結婚記念日で、船室には船から祝福のカードが届けられた。

ちょうど 25 年前に日本のクルーズ船「おりえんとびいなす」で寄港した。船はその後中国の天津、那覇、そして神戸へ帰港した。当時は日米貿易摩擦などで働き過ぎを見直すという意味で「ゆとりっちクルーズ」と称し会社の労働組合主催の船旅だった。

今、思うと素晴らしい名前になっていると感心する。「ゆとり」つまり時間を、リッチに、贅沢に使うということになる。クルーズの本質をついている。

それにしても 25 年経った今もまた日本人は「働き方改革」をしているから面白い。

話はそれるが、私は現在まで自分の旅行の記録をまとめる作業をしている。だから 25 年前の釜山訪問の記録がある。海外旅行はデータが多く残っているが、国内旅行は記録も記憶もおぼつかない部分が多い。それでも何とかしつつ国内と海外の自分旅行史を執筆中である。

いつ完成するか分からないが、過去と対話することで未来のヒントをもらえる。温故知新だ。

■釜山の変貌

25 年ぶりの釜山の港は見違えるように変わっており、近代的なクルーズターミナルが出来て、埠頭も増えている。QE の他にイタリアのコスタネオロマンチカと関釜フェリーが停泊しているが、まだ栈橋が一隻分余っている。さらに隣の釜山北港は大規模な工事をしている。

横浜の大栈橋に船が 2 隻着いたらいっぱいになり、貨物用の大黒埠頭にまわる。そもそもベイブリッジは高さが足りないので大きい船はくぐれない。

上陸して驚いたのは移動式の両替所だ。大型トラックの荷台に両替所を乗せたものなのだが、付け焼刃で作ったようなものではなく本格的なものになっている。車体には Busan Bank と書かれている。私もいろいろな国に行っているが、こんな両替所は見たことがない。確かにこんなものがあれば便利だ。一本取られたという思いがする。



25 年前と同じチャガルチ市場、国際市場に行く。人々の生活はあまり変わっていない気がする。

■料理が美味しい船は

船に戻って9階のレストランから釜山の街を見ながらちょっと遅い昼食をとる。

隣に座った夫婦と会話を始める。話題はクルーズのことで、ちょっと話ただけでもかなり詳しいことがわかる。今まで乗船は80回、世界のクルーズ船のほとんどは乗っているというからレベルが違う。

どの船が良かったなどと漠然とした質問をするのは愚の骨頂と思い、どの船の料理が美味しかったかと聞くと、同じレベルの船ならばほとんど差がないという。それでもあえて言えば日本船の料理が美味しいと、さらに日本丸だという。理由は小さい船なのでサービスが行き届くという。

総トン数では、約9万トンのQEに対して飛鳥IIは約半分、日本丸は1/4しかない。

別の人からも日本丸の料理が美味しいと聞いた。その人も船が小さいことを理由にしており、料理が冷めないうちに配膳されるからだという。

大きさだけで決まるものではないということか、大型化するクルーズ船にとって身の丈にあった戦略があるということだろう。クルーズ船を総トン数で診ていた自分が恥ずかしくなる。

今回の旅で気になる地方の街興し戦略も、身の丈に合う地域の利を活かすことかもしれない。

■八代でもクルーズ

熊本の八代に寄港する。数日前に八代在住の白井さんから出迎えに来てくれるというメールが入った。白井さんは、このQEの旅を紹介してくれたあの人だ。

お礼メールを出した時に見るべき場所があれば教えて欲しい旨を書いたら、ありがたいことに案内してくれるということになり本日に至った。

その白井さん夫妻と彼の友人の木村さん夫妻も一緒に、何と木村さんが所有するクルーザーで天草を海から案内してくれるという。まさしく「旅は道連れ、世は情け」、実にありがたい。

白井さん夫妻は旅行好きで、奥さんが書いた旅行記を見せてもらったが、仲睦まじい熟年夫婦の旅の様子が見事に伝わってくる。

木村さん夫妻は現役世代のおしどり夫婦で、こんな豪華なクルーザーを持っているとはただ者ではない。

早速クルーザーに乗せてもらう。もちろん船長は木村さんだ。

10人くらい乗って宿泊も可能という豪華クルーザーは、大型客船とはまた違う良さがある。

八代海を挟んで八代の対岸の三角西港にやって来る。ここは三池炭鉱の石炭を輸出した明治期の港がそのまま残っており世界遺産登録されている。

この三角までが宇土半島で、これよりも西にある天草の島々は天草5橋で繋がっている。いわば天草5橋がこの島々の生命線になっており、最近この橋を含む道路は渋滞がひどいという。

そのために八代海にもうひとつ橋を架けるという大きな構想の話が始まる。そんな話をする彼らは実に楽しそうな顔をしている。

湯島という 280 人が暮らす小さな島に上陸する。天草諸島の北側に位置するのでここは有明海だ。

船着き場で面白い光景が目に入る。

栈橋の船を直接つける部分は海に浮いていて潮の満ち引きに応じて上下する構造になっており、その浮いている部分が大きく上下するので 3m くらいの階段が付いている。陸地側のコンクリート部分にも 2m くらいの階段があるので、合計 5m くらいの干満の差に対応できそうだ。

そんなにこの地域の潮の干満の差があるのかと驚いてしまう。神奈川県湘南海岸の潮の干満の差は 1m くらいだったろう。

潮の満ち引きの原理は月の引力で海水が吸い上げられることなので閉ざされた海ではほとんど満ち引きがない。だから日本海でも、地中海でも潮の干満の差は少ない。

ここ有明海は、一見閉ざされているが、リアス式海岸の入り江のようになっている。そういう場所では津波が増幅されるように、潮の干満もその地形によって増幅されるらしい。

調べてみると、ここ有明海が日本で一番干満の差が大きく、奥の方では 6m もある。この湯島付近は有明海の入口なので 4m くらいだろう。八代海でも 3.5m あるという。ついでに先日寄港した日本海の境港は干満の差は 0.1m しかない。

この干満の差が、潮干狩りやムツゴロウなどの観光資源に大きく関係するのだろう。



快適にクルーザーを走らせ、フィッシャリーナ天草という施設にクルーザーをつける。

ここの係留施設には高級感あふれるクラブハウスがある。中に入るとお洒落な空間が広がっていて、大きな窓の向こうには係留してあるクルーザーやヨットが見える。とてもロマンティックな場所で、QE の豪華な船内にも決して負けていない。

木村さんの話ではここで「船コン」と名打ってお見合いパーティを開いたという。船仲間がボランティアで船を出し合って夕陽を見ながらクルージングをしてこのクラブハウスでパーティをして盛り上がったというが、集客には苦勞したらしい。

私は趣味や道楽を活かした社会貢献にとっても心ひかれるものがあり、「少子化対策のためにも、是非またやって下さい」とお願いした。

実は彼らは NPO 法人熊本県海難救助隊という海の事故を減らすためのボランティア活動をしている。今回も QE 入港の 2 時間前から船での出迎え（安全確認）をしてもらう。こういう送迎は他の港ではやっていないというから大変ありがたい。

また一方ではクルーズ船専用ターミナルも作っている。

今回、各寄港地で様々な街興しのスタイルを見てきたが、ここ八代は地域一体になって海からの街興しをしている気がする。

タクシーに乗って洒落たレストランに行く。このレストランは海に面しており、船を係留出来る設備があるが、クルーザーで食事に立ち寄るのは断られたという。

「ここに船を着けることができれば恰好良かったのになあ」と木村さんが言う。確かにそうだが、ここに來ただけで私たち夫婦にとっては十分に恰好良い。

第五章 太平洋、そして帰港

■ 厨房と総料理長

私たちがいつも夕食を食べているレストランの厨房の見学ができるというので行ってみると既に 200 人くらいは並んでいるという人気ぶりである。

厨房に案内されると整理整頓された職場に驚く。職場の整理整頓は仕事の基本だと私が技術者時代にいつも言われていたことを思い出す。

シェフたちは笑顔で迎えてくれるのが印象的で、愛想笑いではなく本当に心から喜んで歓迎してくれているのが分かる。



見学を終えるとレストランに出てくるように見学ルートが組まれている。そこではチョコレートやビスケット、ケーキなどが振る舞われている。

そして最後に総料理長が挨拶する。総料理長は太ったおじさんだが、比較的若いイギリス人だ。そして彼もまた笑顔がとてもいい。美味しいものをたくさん食べて幸せ太りという感じが何となく好感が持てる。貧乏で痩せているおじさんが作る料理は決して美味しそうには見えない。

挨拶の中で、彼が日本で感激したことはやはり日本食だという。

私も世界を旅して常々思うことは、日本食の素晴らしさだ。出汁（だし）をとる文化は日本が群を抜いている。つまり味の深みが違う。

そして彼が好きな日本食はラーメン、カツカレーだという。

■日本食の進化

日本のラーメンはもはや本家中国の拉麺を遥かに超えた日本食になっている。

中国から拉麺が伝わったのは江戸時代で、日本で最初に拉麺を食べたのは徳川光圀（水戸黄門）だという説がある。その江戸時代から進化が始まり、1947年に博多で豚骨ラーメン、1954年に札幌で味噌ラーメンが登場して、以降は塩や醤油豚骨などバリエーションが広がる。

そして街興しに喜多方ラーメンや佐野ラーメン、ご当地ラーメンの時代になる。

インスタントラーメンも1958年に「チキンラーメン」、1971年には「カップヌードル」が発売されて、世界中にラーメン文化が広まった。

私の友人は「インスタントラーメンは20世紀最大の発明」と言っている。

私は「それならばノーベル賞をあげた方がいいのに」と彼に言ったが、彼からは「ノーベル賞には対応する賞がない」と言われたことを思い出す。確かに医学賞や化学賞はあってもインスタントラーメンを表彰する賞ではない。平和賞ではおかしいか。

さらに総料理長がカツカレーを好きだということに、私は特別な興味を示す。

カレーは日本がオリジナルではないが、こちらも本家を上回る進歩をしている。何しろインド人が自国への土産に日本のカレールウを大量に買って帰るといふ。

カツはヨーロッパから入ってきたカツレツから進化した。その当時のカツレツは牛肉か鳥肉だったが、これを豚肉にして厚くサクサクに揚げるなど独自に進化した。

その2つが融合したカツカレーは実に美味しい。そして興味深い。

日本のモノづくり企業の得意な技術は、無から有を作り出す技術ではなく「組み合わせ技術」や「擦り合わせ技術」という改良技術だ。それは料理でも同じで、「組み合わせ」は様々な種類の素材や料理の組み合わせを試し、試行錯誤を繰り返す。「擦り合わせ」は微妙な味付けなど創意工夫を加えることでいわゆる改良することだ。もちろん日本料理には歴史も伝統もあるが、昨今の進化においてはその2点において極めて優れていると私は思う。

■レストランのイベント

本日はレストランのファイナルイベントがある。白いコック帽のシェフ全員が音楽に合わせて入場し、乗客はナプキンを振り回して歓迎する。続いてウエイターとソムリエの紹介になる。

私のところにいつもアルコールの注文を聞きに来る若いウエイターはアルコール専門のウエイターかと思っていたがソムリエだったとは驚きで、各テーブルに専属のソムリエを配置していたことになる。そんなことならばビールではなくワインを注文すれば良かった。

そして今までの9日分のメニューがプレゼントされる。それには担当したウエイターからのお礼の言葉とサインも添えられている。

同じようなレストランのファイナルイベントを他のクルーズ船でも体験してきたが、それらと比較して QE のものは派手さこそないが洗練されている。

■最後のサプライズ

ベッドメイキングや掃除には1日2回ハウスキーパーが入ってくれるが、毎日のように無料の紅茶やコーヒーとスナックが補充されており、それとは別に夜にはチョコレートが必ず置かれていた。

最終日の前日に船室に戻ると、ベッドメイキングされたベッドカバーの上にはチョコレートの他にプレゼントが2個置かれている。開けてみるとティーカップが入っており、そのカップには Queen Elizabeth と印字されている。船からの嬉しい贈り物だ。

妻は大喜びしている。女性はプレゼントに弱い。ましてや Queen Elizabeth のカップは格別だ。

初日はスパークリングワイン、最後はティーカップとは、QE はやってくれるね。

■厨房データ

厨房の見学の時にパンフレットもらった。そこに書かれている数字が興味深い。

乗客・乗員の人数は約3000人、その食料の調達には10人の担当者がいて、船内には17の巨大な冷蔵庫、冷凍庫、乾燥庫がある。生鮮食料品は約7日、その他は約14日間隔で仕入れる。その14日間の食材消費量は以下の通りだ。しかし何トンと書かれてもピンとこない。

フルーツ、野菜	70 トン
肉と魚介類	50 トン
チーズ、乳製品	30 トン
卵	4666 ダース (55992 個)
ワイン	5250 本
紅茶	70000 杯

洗浄担当者は62名いる。一度の食事で2万以上の皿やグラスを洗うので基本は機械が洗浄する。

ベルトコンベア式の食器洗い機は、熱い洗浄液で汚れを落とし、泡を流した後に熱湯消毒する。その全行程は2分間で終わり、自然乾燥させるという。すごい！

■旅を振り返る

今回の船旅は偶然にメールをもらい、偶然見たポスターで決断した。

その後も函館駅にバスで降りた時に女子高生たちに偶然会い、ある判断をして船内の演奏会に足を運ぶ。そしてスタンディングオーバーションに一人の女子高生のとっさの判断で有終の美を飾り、私たちも感動をもらった。

旅は偶然の連続で、決してルーティンになっていない。だから常に判断を求められ、失敗もあれば成功もある。そして成功は多くの場合には感動につながる。だから旅には偶然と感動が付いて回る。それが旅のチカラであると私は信じている。

QE という船は極めて非日常性が高い。だから感動も多いのかもしれない。

船旅という面ではどうしても2ヵ月前に乗ったダイヤモンド・プリンセスの旅と比較してしまう。細部は旅行記を読んで頂きたいが、簡単に言えば船の針路の違いだろう。

クルーズ船はカジュアル、プレミアム、ラグジュアリーの3つに格付けされている。ダイヤモンド・プリンセスは真ん中のプレミアム・クラスで総トン数は約11万6000トン、プールなどの設備が充実しており大人から子供まで家族で楽しめるようになっていた。

それに対してQEは最上位のラグジュアリー・クラス、約9万トンで大型化するクルーズ船では決して大きくはないが、大人が楽しめる船だ。

大人が楽しめる船とは、どんな船なのだろうか。

QEの時間の流れが何か違うように感じられると書いたが、レストランは豪華なだけでなく、座っているだけで何となく心が休まる。アフタヌーンティーも然りだ。通りがけのロビーで聞く音楽、ギャラリー、そして図書館など贅沢な時間を過ごすことが、そう感じる要因だろう。

ガラ・イブニングは適度な緊張感をもたらしてくれる。夕食を食べに行くために妻と正装をして出かけるなどということは私の日常生活においてはまずない。ましてや仮面舞踏会などは全くの非日常、中世ヨーロッパを旅しているような気がしてくる。

■QEの魅力

QEの魅力というものが何となく分かってきたような気がする。豪華なことはもちろん必要かもしれないが。乗客は豪華さの向こうの何かを求めて乗船していると思う。

3階の外周の廊下にはQueen Elizabethと刻まれたベンチが置いてある。高さは海面から16mくらいなので、田崎真也の話ではここに座ると約14km先の海面まで見ることが出来る。

乗客はベンチに座ってゆっくり海を眺める時に、14km先までの海面に興味があるのではないだろう。

あそこに行くのにどのくらい時間がかかるとか、あの漂流している木片は何年かけてここまで来たのだろうかとか、大海原での距離を時間に置き換えて見ているような気がする。それはちょうど宇宙空間で距離を表現するときには何光年と言うように時間に置き換えるのに似ている。

宇宙は大海原に例えられることが多い、どちらもロマンの宝庫だ。



海には人間の想像力をかきたてる、そんな力もある。そしてその海を航海する QE という船は自分の想う過去や未来へ連れて行ってくれる。

海を眺めて船旅をしていると今まで歩んできた自分の人生、家族との思い出、もっと大きく言うと人類の歴史も振り返る。

自分旅行史を執筆していると、過去と対話することで未来のヒントをもらえると書いたが、同様に将来の自分はこうなるだろう、こうなりたいとか、子供や孫の将来の姿や、100年先の未来をも過去が教えてくれる。

QE には現実社会とは違う時間が流れている。だから「思い出や希望が交錯する時間を自在に航行する船」というもので、自在性からすれば木村さんのクルーザーのようなものかもしれない。

乗客は高い代金を払ってそれを求めて乗船している。ただ乗客はそのことに気が付いていない。何故ならば豪華な設備、エンターテインメントや料理はそのための演出で、恐らく乗客はそれらが演出だと分からないからだ。夢や幻想は見ている本人にはその認識がない。

これがラグジュアリーたる QE の魅力なのかと、私は妙に納得してしまう。

■旅の記録

2019年4月19日（金）～4月28日（日）の日本一周+釜山10日間クルーズの行程を記す。

1日目	横浜出港	13時乗船、18時分出港（大黒埠頭）
2日目		終日航海 フォーマル
3日目	函館寄港	8時入港、18時出港
4日目	秋田寄港	8時入港、17時10分出港
5日目	金沢寄港	9時入港、18時出港
6日目	境港寄港	8時入港、17時出港 フォーマル、仮面舞踏会
7日目	釜山寄港	7時入港、17時出港
8日目	八代寄港	7時30分入港、17時出港 フォーマル
9日目		終日航海
10日目	横浜帰港	6時入港、10時下船（大黒埠頭）

クルーズの総費用は2人で約39万円。一人当たりのクルーズ代金は15万円、他に税金やチップなど最低限必要な費用は約3.2万円になった。以下に2人分の詳細を記す。

旅行代金（クルーズ代金150000円×2、税金等20988円×2）	341976円
チップ 11.5USD×9泊分×2人分=207USD	約23000円
船内費用（酒179.75USD、仮面17USD）196.75USD	約20000円
寄港地での出費	6424円
函館（昼食2400円、日帰り入浴440円×2、市電250円×2×2）	
秋田（ビール800円、ババヘラアイス200円）	
境港（入浴510円×2、ハガキ62円×2枚）	